サガレンと八月

宮沢賢治

「何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの、何かしらべに来たの。」

西の山地から吹いて来たまだ少しつめたい風が私の見すぼらしい黄いろの上着をぱたぱたかすめながら何べんも通って行きました。

「おれは内地の農林学校の助手だよ、だから標本を集めに来たんだい。」私はだんだん雲の消えて青ぞらの出て来る空を見ながら、威張ってそう云いましたらもうその風は海の青い暗い波の上に行っていていまの返事も聞かないようあとからあとから別の風が来て勝手に叫んで行きました。

「何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの、しらべに来たの、何かしらべに来たの。」もう相手(あいて)にならないと思いながら私はだまって海の方を見ていましたら風は親切(しんせつ)にまた叫ぶのでした。

「何してるの、何を考えてるの、何か見ているの、何かしらべに来たの。」私はそこでとうとうまた言ってしまいました。

「そんなにどんどん行っちまわないでせっかくひとへ物(もの)を訊(き)いたらしばらく返事(へんじ)を待(ま)っていたらいいじゃないか。」けれどもそれもまた風がみんな一語ずつ切れ切れに持(も)って行ってしまいました。もうほんとうにだ

めなやつだ、はなしにもなんにもなったもんじゃない、と私がぷいっと歩き出そうとしたときでした。向うの海が孔雀石いろと暗い藍いろと縞になっているその堺のあたりでどうもすきとおった風どもが波のために少しゆれながらぐるっと集って私からとって行ったきれぎれの語を丁度ぼろぼろになった地図を組み合せる時のように息をこらしてじっと見つめながらいろいろにはぎ合せているのをちらっと私は見ました。

　また私はそこから風どもが送ってよこした安心のような気持も感じて受け取りました。そしたら丁度あしもとの砂に小さな白い貝殻に円い小さな孔があいて落

ちているのを見ました。つめたがいにやられたのだな朝からこんないい標本(ひょうほん)がとれるならひるすぎは十字狐(じゅうじぎつね)だってとれるにちがいないと私は思いながらそれを拾(ひろ)って雑嚢(ざつのう)に入れたのでした。そしたら俄(にわ)かに波(なみ)の音が強くなってそれは斯(こ)う云(い)ったように聞こえました。「貝殻(かいがら)なんぞ何にするんだ。そんな小さな貝殻なんど何にするんだ、何にするんだ。」

「おれは学校の助手(じょしゅ)だからさ。」私はついまたつりこまれてどなりました。するとすぐ私の足もとから引いて行った潮水(しおみず)はまた巻(ま)き返(かえ)して波になってさっとしぶきをあげながらまた叫(さけ)びました。「何にするんだ、何

にするんだ、貝殻なんぞ何にするんだ。」私はむっとしてしまいました。

「あんまり訳がわからないな、ものと云うものはそんなに何でもかでも何かにしなけぁいけないもんじゃないんだよ。そんなことおれよりおまえたちがもっとよくわかってそうなもんじゃないか。」

すると波はすこしたじろいだようにからっぽな音をたててからぶつぶつ呟くように答えました。「おれは また、おまえたちならきっと何かにしなけぁ済まないものと思ってたんだ。」

私はどきっとして顔を赤くしてあたりを見まわしま

した。

ほんとうにその返事(へんじ)は謙遜(けんそん)な申(もう)し訳(わ)けのような調子(ちょうし)でしたけれども私はまるで立っても居(い)てもいられないように思いました。

そしてそれっきり浪(なみ)はもう別(べつ)のことばで何べんも巻(ま)いて来ては砂(すな)をたててさびしく濁(にご)り、砂を滑(なめ)らかな鏡(かがみ)のようにして引いて行っては一きれの海藻(かいそう)をただよわせたのです。

そして、ほんとうに、こんなオホーツク海のなぎさに座(すわ)って乾(かわ)いて飛(と)んで来る砂やはまなすのいい匂(におい)を送(おく)って来る風のきれぎれのものがたりを聴(き)いていると

ほんとうに不思議(ふしぎ)な気持(きもち)がするのでした。それも風が私にはなしたのか私が風にはなしたのかあとはもうさっぱりわかりません。またそれらのはなしが金字の厚(あつ)い何冊(さつ)もの百科辞典(ひゃっかじてん)にあるようなしっかりしたつかまえどこのあるものかそれとも風や波(なみ)といっしょに次(つぎ)から次と移(うつ)って消(き)えて行くものかそれも私にはわかりません。ただそこから風や草穂(くさぼ)のいい性質(せいしつ)があなたがたのこころにうつって見えるならどんなにうれしいかしれません。

*

タネリが指をくわいてはだしで小屋を出たときタネリのおっかさんは前の草はらで乾かした鮭の皮を継ぎ合せて上着をこさえていたのです。「おれ海へ行って孔石をひろって来るよ。」とタネリが云いましたらおっかさんは太い縫糸を歯でぷつっと切ってそのきれはしをぺっと吐いて云いました。

「ひとりで浜へ行ってもいいけれど、あすこにはくらげがたくさん落ちている。寒天みたいなすきとおしてそらも見えるようなものがたくさん落ちているからそれをひろってはいけないよ。それからそれで物をすか

して見てはいけないよ。　おまえの眼(め)は悪(わる)いものを見ないようにすっかりはらってあるんだから。　くらげはそれを消(け)すから。　おまえの兄さんもいつかひどい眼(め)にあったから。」「そんなものおれとらない。」タネリは云(い)いながら黒く熟(じゅく)したこけももの間の小さなみちを砂(すな)はまに下りて来ました。　波(なみ)がちょうど減(ひ)いたところでしたから磨(みが)かれたきれいな石は一列(いちれつ)にならんでいました。「こんならもう穴石(あないし)はいくらでもある。　それよりあのおっ母(かあ)の云ったおかしなものを見てやろう。」　タネリはにがにが笑(わら)いながらはだしでそのぬれた砂をふんで行きました。　すると、ちゃんとあったのです。　砂の一

とこが円くぽとっとぬれたように見えてそこに指をあててみますとにくにく寒天のようなつめたいものでした。そして何だか指がしびれたようでした。びっくりしてタネリは指を引っ込めましたけれども、どうももうそれをつまみあげてみたくてたまらなくなりました。拾ってしまいさえしなければいいだろうと思ってそれをすばやくつまみ上げましたら砂がすこしついて来ました。砂をあらってやろうと思ってタネリは潮水の来るとこまで下りて行って待っていました。間もなく浪がどぼんと鳴ってそれからすうっと白い泡をひろげながら潮水がやって来ました。タネリはすばやくそれを

洗（あら）いましたらほんとうにきれいな硝子（ガラス）のようになって日に光りました。タネリはまたおっかさんのことばを思い出してもう棄（す）ててしまおうとしてあたりを見まわしましたら南の岬（みさき）はいちめんうすい紫（むらさき）いろのやなぎらんの花でちょっと燃（も）えているように見えその向（むこ）うにはとど松（まつ）の黒い緑（みどり）がきれいに綴（つづ）られて何とも云（い）えず立派（りっぱ）でした。あんなきれいなところをこのめがねですかして見たらほんとうにもうどんなに不思議（ふしぎ）に見えるだろうと思いますとタネリはもう居（い）てもたってもいられなくなりました。思わずくらげをぷらんと手でぶら下げてそっちをすかして見ましたらさあどうでしょう、

いままでの明るい青いそらががらんとしたまっくらな穴のようなものに変ってしまってその底で黄いろな火がどんどん燃えているようでした。さあ大変と思ってタネリが急いで眼をはなしましたがもうそのときはいけませんでした。そらがすっかり赤味を帯びた鉛いろに変ってい海の水はまるで鏡のように気味わるくしずまりました。

おまけに水平線の上のむくむくした雲の向うから鉛いろの空のこっちから口のむくれた三疋の大きな白犬に横っちょにまたがって黄いろの髪をばさささせ大きな口をあけたり立てたりし歯をがちがち鳴らす恐ろ

しいばけものがだんだんせり出して昇(のぼ)って来ました。もうタネリは小さくなって恐(おそ)れ入っていましたらそらはすっかり明るくなりそのギリヤークの犬神(いぬがみ)は水平線まですっかりせり出し間もなく海に犬の足がちらちら映(うつ)りながらこっちの方へやって来たのです。

「おっかさん、おっかさん。　おっかさん。」タネリは陸(りく)の方へ遁(に)げながら一生けん命(めい)叫(さけ)びました。　すると犬神はまるでこわい顔をして口をぱくぱくうごかしました。もうまるでタネリは食われてしまったように思ったのです。「小僧(こぞう)、　来い。　いまおれのところのちょうざめの家に下男(げなん)がなくて困(こま)っているとこだ。　ごち走(そう)してやる

から来い。」云ったかと思うとタネリはもうしっかり犬神に両足をつかまれてちょぼんと立ち、陸地はずんずんうしろの方へ行ってしまって自分は青いくらい波の上を走って行くのでした。その遠ざかって行く陸地に小さな人の影が五つ六つうごき一人は両手を高くあげてまるで気違いのように叫びながら渚をかけまわっているのでした。

「おっかさん。もうさよなら。」タネリも高く叫びました。すると犬神はぎゅっとタネリの足を強く握って

「ほざくな小僧、いるかの子がびっくりしてるじゃないか。」と云ったかと思うとぽっとあたりが青ぐらく

なりました。「ああおいらはもういるかの子なんぞの機嫌を考えなければならないようになったのか。」タネリはほんとうに涙をこぼしました。

そのときいきなりタネリは犬神の手から砂へ投げつけられました。肩をひどく打ってタネリが起きあがって見ましたらそこはもう海の底で上の方は青く明くただ一とこお日さまのあるところらしく白くぼんやり光っていました。

「おい、ちょうざめ、いいものをやるぞ。出て来い。」

犬神は一つの穴に向って叫びました。

タネリは小さくなってしゃがんでいました。気がつ

いて見るとほんとうにタネリは大きな一ぴきの蟹に変っていたのです。それは自分の両手をひろげて見ると両側に八本になって延びることでわかりました。

「ああなさけない。おっかさんの云うことを聞かないもんだからとうとうこんなことになってしまった。」

タネリは辛い塩水の中でぼろぼろ涙をこぼしました。

犬神はおかしそうに口をまげてにやにや笑ってまた云いました。「ちょうざめ、どうしたい。」するとごほごほいやなせきをする音がしてそれから「どうもきのこにあてられてね。」ととても苦しそうな声がしました。

「そうか。そいつは気の毒だ。実はね、おまえのとこ

に下男がなかったもんだから今日一人見附けて来てやったんだ。蟹にしておいたがね、ぴしぴし遠慮なく使うがいい。おい。おい。きさまこの穴にはいって行け。」

タネリはこわくてもうぶるぶるふるえながらそのまっ暗な孔の中へはい込んで行きましたら、ほんとうに情けないと思いながらはい込んで行きましたら犬神はうしろから砂を吹きつけて追い込むようにしました。にわかにがらんと明るくなりました。そこは広い室であかりもつき砂がきれいにならされていましたがその上にそれはもうとても恐ろしいちょうざめが鉢巻をして寝ていました。（こいつのつらはまるで黒と白の棘だ

らけだ。こんなやつに使われるなんて、使われるなんてほんとうにこわい。）タネリはぶるぶるしながら入口にとまっていました。するとちょうざめがううと一つうなりました。タネリはどきっとしてはねあがろうとしたくらいです。「うう、お前かい、今度の下男は。おれはいま病気でね、どうも苦しくていけないんだ。

（以下原稿空白）

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
　　1996（平成8）年6月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　1995（平成7）年5月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2009年8月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。